

お袋は九十五歳まで生きた。

その一生は苦勞の連続であった。

お袋が亡くなったとき、「お袋の日記」が出てきた。大学ノートや便箋に九冊もあった。日記は思い出して書いたものらしくところどころダブったり日にちが判明できないところもある。赤ボールペンで書いたここから始まつていた。

かんじ（ん）なこと（が）ありますので
一寸出てくれませんか。

お礼は私のことでおれ（い）をしますし
そのままだます私で（は）ありません
かんじ（ん）なことで私のことをきいて
ください

お礼は必ずいたします

最後に書いた日記だ。

これは死ぬ間際に書いたものだ。

彼女は何を聞いて欲しかったのだろう。

親父は五人の子供を残して死んだ。

それからのお袋はまず、衣料品の行商をして生活した。金はもちろんない。問屋から仕入れることもできない。親戚の衣料品店から品物を借りた形にして、行商をしたのである。

したがって儲けも知れている。しかし学もないお袋のやることはほとんどない。

背中より大きな荷物を背負って数キロも歩いていくのだ。

親父はそのころ警察を退職していた。小さな町の所謂エリートだった親父は気に入らない仕事はしなかった。

お袋に苦勞をかけて自分では何もしなくて酒ばかり呑んでいた。

時間があつて身体が元気ではやることは酒を呑むか賭け事に走るか、女に興味を持つようになる。しかも自分の女房はいない。

案の定、女ができた。

人口一万余千の小さな町では瞬く間に知れ渡る。相手は町一番の美人であった。当然のように、妊娠させたのである。

久美子、緑、弓子、一彦、孝浩たかひろの五人の子供がいた。

久美子は、今年から、大阪に就職をしていた。まだ一才の孝浩を負ふつて母は行商に出かけていた。そんな毎日であつた。

緑に妹や弟の面倒を見させ父親の寿むかしは、女の、恵子のもとに通い続けていた。恵子の母親が仕事に出かけている隙を狙つてのことである。

そんなことがいつまでも続くわけがなく、恵子の腹も段々と目立つてくる。

「私、子供を生むわよ」

「……」

優柔不断な寿は、生めとも生むなとも言わなかった。

このことは知らぬ者はいないという事態になつても、知らぬは妻の富子と恵子の母親だけという奇妙なことになつていた。

「さつき恵子ちゃんを見かけたけど、あの子、お腹大きくなつたみたいね」

行商から帰つてきた富子が何気なく言った。

寿は見透かされていと思つた。